

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 7 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2022

課題番号：20K00004

研究課題名(和文) 時間意識とそのメタファー的概念化に関する哲学的研究

研究課題名(英文) Philosophical Investigation of Time-Consciousness and its Metaphorical Conceptualization

研究代表者

宮原 勇 (Miyahara, Isamu)

名古屋大学・人文学研究科・名誉教授

研究者番号：90182039

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：「メタファー研究の方法としてのメンタル・スペース理論の可能性」、「マッピングによる分析とその実例」、「英語における時間に関するイディオムに見られるメタファー」、「数学の用語と表現方法におけるメタファー」、「英語・日本語・モンゴル語での時間表現のメタファー」、「メタファー研究におけるアリストテレスの位置づけ」、「リチャーズのメタファー論はどのような点が画期的か」、「メタファー研究と文化比較に関する事例研究」、「類似性を基盤とした比喩的言語表現とアナロジーの問題」といったテーマで研究会を開き、議論した。そして、「時間・記憶 現象学的分析とその存在論的前提」という論文を執筆した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

アリストテレスからアウグスティヌスまでの時間論に関して最新の研究を踏まえて分析するとともに、マックタガートからウィリアム・ジェイムズ、ブレンターノ、フッサールの時間論の包括的な分析をするとともに、そのような哲学的時間論に潜むメタファー構造を、最新の認知言語学の知見から分析した。それによると、時間意識の記述や哲学的時間論においては、時間現象を図式、ないしはダイアグラムという手法を用いて表現するという現象が見られたが、本研究では、そのような幾何学的図式をメタファー的に用いた議論の特徴を詳細に分析した。

研究成果の概要(英文)：We investigated the following themes; The Possibility of Mental Space Theory as a Method of Metaphor-Study, An Analysis by means of Mapping and its Examples, Concerning the Method of Conceptual Blending, Metaphorical Expressions concerning Time in English, Metaphorical Terminology and Expressions in Mathematics, Comparative Metaphor-Expressions concerning Time in English, Japanese, and Mongolian Language, The Position of Aristotle among Metaphor-Study, On What Points is the Metaphor-Theory of Richards epoch-making?, Metaphor-Study and Example-Study concerning Cultural Comparison, Metaphorical Linguistic Expressions based upon Similarity and the Problem of Analogy. And we had meeting concerning these themes. And I wrote the paper; Time and Memory: A Phenomenological Analysis and its Ontological Premises.

研究分野：哲学、現象学、認知言語学

キーワード：現象学 認知言語学 時間論 メタファー アリストテレス アウグスティヌス ブレンターノ フッサール

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

### 1. 研究開始当初の背景

申請者はこれまで現象学者フッサールの認識論と言語理論に焦点を当てて研究してきたが、特にフッサールの言語論は概念的「意味」の意識作用による「付与」を中心とする言語論であり、特に唯名論的規約主義が強くなった20世紀後半の言語哲学においては、その存在意義が危うくなっていた。しかし、1980年代以降の認知革命を経て、言語学において、(生成文法派ではない)認知言語学がラネカーやレイコフ、ターナー、ジョンソンらによって提唱され、再び言語表現を発話主体による「概念化」の産物として捉える研究方法が広がってきた。申請者は、フッサール現象学の言語論とラネカーの言語論との類縁性を指摘し、言語表現における subjectification や intersubjectivity、さらには移動動詞の分析における「完了形」と「未完了形」のアスペクトの違いを分析する際のラネカーのイメージ・スキーマと、フッサール時間論のダイアグラムの類似性を指摘してきた。そのような研究において、認知言語学の洞察の中でも、言語表現全般における根源的なメタファーの機能の意味を明らかにした「概念メタファー」の理論に注目した。そもそもメタファーとは、「ソース・ドメイン」、つまり<比較的わかりやすく分節化されている領域>と、それをわかりやすい表現でもって言い換えようという「ターゲット・ドメイン」、つまり<抽象的であるか、あるいは具体的であっても、時間的事象のように明確には分節化しにくい領域>との間の指示の移動である。その意味では、まさに哲学の分野における時間論の議論において使用されている諸概念は、無意識的に空間的事象をモデルとした、「概念メタファー」である。したがって、申請者は、フッサールの時間意識の分析でも、本質的に空間的特徴を含むことを見れば、時間意識そのものをいかに概念化し、言語化するかに関する徹底的な反省を経なければ、特に初期フッサールのテキストの十全なる解釈は不可能であるとの洞察に至った。

### 2. 研究の目的

本研究は、初期・中期フッサールの時間意識の現象学的分析に対して、John Ellis McTaggart の論文 “The Unreality of Time” を端緒として展開されて来ている A 系列と B 系列の優先性に関する議論や最近の分析哲学系の時間論での概念分析の成果を取り入れ、時間意識の現象学的分析を最新の時間論の概念装置でもって再検討しようとする試みである。言い換えれば、そもそもわれわれの時間意識はどのように概念化されるかを、現象学、分析哲学、認知言語学のメタファー論によって解明しようとするものである。

### 3. 研究の方法

第1段階 「フッサールの時間意識の分析に関する解明と、その概念化の問題点の究明」  
時間意識に関する初期・中期のフッサールの現象学的分析は、フッサール著作集の第10巻『内的時間意識の現象学』(1893-1917) と第33巻『時間意識に関するベルナウ草稿』(1917/18)として刊行されているが、従来からドイツの分析哲学系哲学者 Gerhard Seel の議論、とくに論文「時間的なるものはいかにして可能か」(2005) や「時間意識に関わるフッサールの諸問題と彼がそれを解決できなかった理由」(2010)での議論を検討した。また、リクールの著作 Paul Ricoeur, Temps et récit, 3, Le temps raconte (1985)を参考にしつつ、アリストテレスとアウグスチヌスの時間論を独自に検討し、さ

らに McTaggart の議論を詳しく検討した。フッサールの時間論を McTaggart 以来の議論の流れの中に位置付けた。また、Barry Dainton(2000/2006) を検討した。そして、最終的には、概念的に精密で明快な現象学的時間論を構築した。

第2段階 「時間意識の概念化に関する認知言語学的究明---時間事象に関する概念メタファーの研究」

レイコフ、ジョンソンの他、マーク・ターナーや、さらにはフォコニエらの Mental Space 理論や Blending の理論、そして認知心理学者の Dedre Gentner の Analogy 理論の検討を検討した。

また、このような作業を通じてゲルマン語系統の言語における時間表現とロマンス語系統の時間表現の異同を考察するとともに、漢字文化圏としては中国語に影響を受けつつ、シンタックス的にはモンゴル語と共通性を有する日本語の特性に自覚的になることで、われわれが日本語話者として、フッサールのドイツ語のテキストを分析する際の「誤解」を排除する可能性が生まれた。

#### 4. 研究成果

特に上記の第一段階の成果としては、下記のようなフッサールの時間論に至る洞察が得られた。

- (1) 長期記憶(ないしは「想起」)と短期記憶(retention)を区別する。前者は、再 現前化(Vergegenwärtigung, re-presentation)であり、後者は広い意味での「知覚」の一部として遂行される「現前化」、ないしは「現在化」(Gegenwärtigung, presentation)である。しかも、それらは、前者が対象を構成する本来の志向性であるのに対し、単に感覚与件が与えられただけの作用であるが、しかし時間的規定を有している準 志向性である。このことによって、「離接性と連続性」のパラドックスが解消されることになった。
- (2) 一定の幅のある「現在」において、「原初的印象」と「未来予持」、そして「過去把持」といった働きが生じている。この一定の幅のある「現在」こそが、「アクチュアルな現在」であり、三つの時制が分化する現場である。この「アクチュアルな現在」において三つの時制が生成されることで、「継起性と同時性」のパラドックスが解消されることとなった。
- (3) 水平方向の流れにおいて、過去方向と未来方向とが分化された「客観的時間経過」が構成される。その都度の「絶対的現在」において縦軸方向(意識の先と記憶の底という垂直方向)において、その都度の局面の意識構造が表現される。メロディーを「時間的对象」の事例とすると、そのメロディーを構成するそれぞれの個別的な音は、フッサールの時間図式(ダイアグラム)においては、右肩下がりに沈み込む「斜辺」(hypotenuse)の志向性によって保持されており、その斜めの方向性によって、その音がなり始めた原初的印象が指し示されている。
- (4) 時間関係とは、認識における感覚与件の性質や認識対象の属性に付与している事象ではなく、人間が時間的对象を認識するときの、統覚的作用のダイナミックな構造に由来している。そして、「時間客観」の連続性は、過去把持・原初的印象・未来予持 という準 志向作用から成る微分構造によって可能となっているのであるが、その連続性が担保される「現場」こそ、認識主観の自己構成がなされている場なのである。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 宮原 勇	4. 巻 特別号
2. 論文標題 フッサールによるハイデガー批判の意味	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 名古屋大学哲学論集	6. 最初と最後の頁 221-249
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18999/nagpj.2021.221	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 宮原勇	4. 巻 62
2. 論文標題 フッサール初期時間論の基本概念とアボリア(II)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 名古屋大学人文学研究論集	6. 最初と最後の頁 65-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18999/joufip.62.65	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 宮原勇	4. 巻 2020号
2. 論文標題 フッサールによるハイデガー批判の意味	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 名古屋大学哲学論集	6. 最初と最後の頁 221-249
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18999/nagpj.2020.221	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 宮原勇
2. 発表標題 時間・記憶・自我 現象学的分析とその存在論的前提
3. 学会等名 中部哲学会大会（招待講演）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------